

平成 19 年 1 月 31 日

## 「モンゴル国子ども達の発達を支援する指導法改善プロジェクト」業務報告書(draft)

～ 指導書作成支援及びモニタリング研修の実施と評価等への助言 ～

篠原文陽児（担当科目：IT 教育）

1. 出張期間 平成 18 年 12 月 13 日（水）～同年 12 月 30 日（土）
2. 目的 モンゴル国カウンターパートとともに実験校等の現状視察と関係者および関係諸機関と意見交換及び協議を行い、すでに開発された「指導書ドラフト」の改善に資するため指導書検討ワークショップ及び試行授業を含むモニタリング研修を実施し、指導助言にあたる。あわせて、本プロジェクト IT 教育領域担当「IT 教育センター」と実験学校において、本事業実施の効果的方策及び関連する事項等に関し、協議を行う。
3. モンゴル国教育の特徴とプロジェクトへの期待

限られた今回の渡航期間の中で、全体会と IT 教育分科会及び研究授業とそれに続く協議会等を通じ、筆者の見聞き得た、期待される「モンゴルの教育の特色」を、簡略にまとめれば、次のようになろう。つまり、

- (1) 生涯学習社会と情報化社会を視野に入れた、ユネスコの提唱する「学習の 4 本柱」が、各教科領域の目標である「4つのコンピテンシー」に対応すること、
- (2) 目標と内容及び方法に関するカリキュラム編成の原理の一つは、学習者の知的、情的及び社会的発達段階に対応する「スパイラル方式」によること、
- (3) 教師主導の「止め処のない一字一句の読み聞かせと、一言残らず忠実に一齐に書かせる指導」ではなく、学習者中心の「児童生徒が自身の学習の仕方考えまとめる過程を重視した学習」であること、
- (4) 授業の終わりに必ず「宿題」があること、  
である。

そして、これに加え、世界的な視野に立つことのできる

- (5) 与えられた環境と資源の中で身の丈の、持続可能な開発のための教育を推進すること、  
である。

その上で、今後プロジェクトに期待されることがら等を記せば、次のようになる。

1. IT 教育指導書ドラフトはモデル校で試行授業をする教員など、執筆者グループ以外に

受入られたか

結論から先に言えば、「十分に受け入れられている」と考えている。

次の事実から明らかである。つまり、今般 12 月 21 日（木）と同 22 日（金）の 2 日間に開催された IT 教育の試行授業では、執筆者グループ以外による授業の試行は、22 日（金）午前中に行われた Setgemj 学校における B 教諭による授業であった。B 教諭の授業は、6 年生を対象に「デスクトップ」がテーマで、2 時間続きの 1 時間目の授業として位置づけられていた。Setgemj 学校では、執筆者グループに E 教諭が参加し、B 教諭は参加していない。しかし、授業後に行われた協議開始直後で B 教諭は、自らの授業を省みて「宿題に関し、家庭のもの、家族にも配慮した」と発言した。この発言は、執筆者グループに所属し趣旨を理解している E 教諭が、執筆者グループではない同僚 B 教諭に、適切に働きかけ、執筆者グループの意図を十分に伝え、B 教諭がこれらを理解し実践したと考えられるからである。

『家庭、家族』を授業に巻き込む努力については、2006 年 6 月の本プロジェクト開始当初教育省内で開催された会合の時点から、指導書の内容を記述するにあたっての重要な視点の一つとして、カウンターパートであるムンフトゥーヤ氏と合意を得、指導書に明記する事項である。また、今般の試行授業以前 12 月 18 日（月）から 20 日（水）に開催された筆者と指導者グループとの事前協議においても、筆者等が頻繁に指摘していた「子どもの直接経験に働きかける教師像の実現」「クラスの友人、家族、近隣の市民に聞いたり、一緒に考えたりする機会を提供する授業の実践」「誇るべきモンゴルの歴史と文化、同じく誇りに思える学校や地域の特色を例示し考える授業の実践」に呼応している。

また、協議の場では、上記に同じく本プロジェクト当初から重要であるとの認識で関係者の意見が一致している、指導書の執筆に当たって「コンピュータが設置されている学校と、コンピュータが設置されていない学校」に配慮することにも発言が及んだ。つまり、「コンピュータがあるのだから、途中の自己評価及び相互評価については、入力を生徒に行わせたり、入力すると励ましなどのメッセージが表示されたりなど、さらに工夫があると良かった」との提案があり、指導者グループ以外の協議への参加者全員の同意が認められた。このことは、指導書の執筆者グループにおいて、執筆にあたっての重要な配慮事項の一つが、十分意識化されていることを示すものであると同時に、執筆者グループ意外にも深く認識されていると判断でき、高く評価したい。

なお、12 月 21 日（木）午後の第 97 学校における N 教諭による授業「アルゴリズム」では、同じく 15 日（金）午前の授業よりも「はるかに生徒に話しかけていた」ことが指導者以外の参加者グループから指摘され、指導書執筆に当たってのもう一つの重要な配慮事項が、指導者グループの所属如何を問わず、大いに浸透していると判断できる。

2. 今後、試行授業を実施し、指導書改善へのフィードバックを得るうえでの留意点

### (1) 試行授業の観察視点に4つのコンピテンシーの具体案を明記すること

試行授業の目的と目標を、12月27日(水)午後教育省におけるネルグイ氏との会見で明らかになったように、「新教育スタンダード」の実施に関わる文書に明記されている、いわば世界的な視野に立って「革新的」(innovative)な「IT教育の4つのコンピテンシー」つまり「IT教育における『学習の4本柱』」に照らした、フィードバックを得る努力が求められる。その結果、試行授業の観察に当たって、12月20日(水)午後、同じくネルグイ氏の指摘になる、本プロジェクトの目標「習うことと教えることの生きた関係を満たすこと」「学習者に学習方法を、教師に教授方法を」を、上記「学習の4本柱」と縦横の関係で具体化した観察項目を明記し、授業者と観察者がともに情報を共有する成果として、全国に配布できる科学的指導書改善が期待される。

したがって、具体的な観察項目案には、大項目として「学習指導」「意欲」「環境」、小項目にはそれぞれ「目標」「内容」「運営」、「学習者理解の意欲」「指導意欲」「創意・工夫への意欲」、「室内の整理・美化」「教室・廊下の掲示物」があげられる。中でも、「創意・工夫への意欲」は、かつての社会主義時代の教育からの決別を示唆し「授業の目標は、新教育スタンダードに示されたコンピテンシーに応じて明細化され記述されているか」「授業の目標には、生徒の知的発達段階に即した科学的知識や技能を明確に含んでいるか」「授業の過程で、下位目標及び事例等ごとに、生徒が考える時間を持てるように、教師が話を止めているか」「授業では、家族や学校周辺あるいは地域住民の協力を推進しようとする発問や活動があるか」「授業中に生徒は楽しんで参加しているか」「宿題には、授業で学んだことがらと日常生活や実務労働への応用が含まれているか」などが、具体案として必須となる。

「4つのコンピテンシー」つまり「学習の4本柱」を明確に教育改革に位置づける政策は、世界の教育改革の中で革新的ともいえる。誤解を恐れずにあえていえば、「4つのコンピテンシー」に即して試行授業の計画を記述し実行する試みを通じ、教師と学習者にこれらを意識化する努力を強いることによるのみ、12月20日(水)午後のネルグイ氏の期待する、本プロジェクトによって開発される8領域の指導書の「質」が確保されることになる。

### (2) その他、他教科領域の授業参観のススメ

ネルグイ氏の12月20日(水)と同27日(水)それぞれ午後の発言内容から判断すれば、筆者担当のIT教育の指導書のみが良くなれば良いというのではなく、8領域すべての指導書に「4つのコンピテンシー」に代表される共通の観点が考慮されなければならない。そのためには、他領域の授業をプロジェクト参加者が相互に見て建設的な意見交換など通じて、情報の共有を図る試みが必要であると考えられる。そうすることによって、実験校のみではなく、全国の学校に配布できる「質」の高い指導書が期待できる。

## 3. モンゴルの指導法改善に資する指導書作成という観点から、今後何が必要か。等

### (1) 情報の共有と共通理解および目標明細化のための継続的定例研修会の開催

「子どもの発達」には、3つの観点がある。知的発達、情意的発達、そして、社会的発達である。筆者は、本プロジェクトに関わって以来これまで「情意的な発達」を第一義に、次いで「社会的な発達」の側面に大きな比重を置いた「子どもの発達」を考えてきている。これらは、今般「4つのコンピテンシー」つまり「学習の4本柱」の中核をなす、いわば人間の社会的な発達、つまり「Learning to be」(人間であることを学ぶ)「Learning to live together」(ともに生きることを学ぶ)であるからである。

情報の共有が、関係者すべてに行き渡っているとは言い難いというのが事実ではなかろうか？

本気になって関係者全員が一同に会して、喧々諤々、とことん議論を尽くす時間と、一つひとつのコンピテンシーを具体化する継続的研修会が必要であるように、思われる。例えば、「学習者中心の学習」とは「学習過程」であり「学習の成果」ではない。ここの共通理解が得られているか、今はまだ疑問が残る。学習過程のあり様を考えようとすれば、「OSIA」「Flanders」「Amidon 等による授業分析手法」や Gagne の「教授事象と内的学習過程」は、基本事項となるであろうし、「教師の教授技術の向上」を図ろうとすれば、「マイクロティーチング」が、基礎となるはずである。

そうした中で、今般指導者開発にあつたての授業のキャッチフレーズである「太る教師」「一時停止の授業」「内緒話のグループ学習」「構造ある授業」の意味が、いっそう明確になるはずである。

### (2) JICA が推進する世界 27 カ国の「学習者中心授業」プロジェクト間の情報交換。

標記の会を実施することで、本プロジェクトの特色と位置づけを、いっそう浮かび上がらせる機会が得られ、プロジェクト遂行に弾みがつくと思われる。

なお、本報告を閉じるにあたって、特に IT 教育の分野における通訳の任に当たるとともに、「OSIA」「子どもの発達と学習の4本柱マトリックス」「指導書発刊にあたって」をはじめとする本プロジェクトの推進にとって直接間接に重要な示唆を与える文献等の内容を翻訳された Ms. Magi 氏に、心から謝意を表したい。彼女の明るさをもった率直で建設的な意見と献身的な支援がなければ、例年になく暖かな気候とはいうものの、筆者にとっては経験のない零下 10 度前後という冷たい寒空の中、まさに凍える思いのした 12 月のウランバートルであつたに違いない。

<以上>